

## ある養蚕教師の肖像 2

厚木の蚕籠は長方形ですが、展示されている円形の蚕籠は会津若松で使われていたものです。全国的にみると、他にも楕円などいろいろな形があったようです。その形に合わせ、蚕座紙の形も決まります。蚕籠を使った棚飼いの導入が比較的新しいこともあり、形を決めたのは派遣された養蚕教師の出身地という説もあります。小林升も、教授員として徳島、千葉などで指導する他、蚕種検査員としても各地を回りました。



生糸の海外需要が増大する明治 17 年に、政府は蚕病試験場を設置し、同 19 年からは「病毒検査員」の養成をはじめました。その後、講習内容をレベルアップすることで「養蚕教師」を育成、各地に派遣しましたが、同時に博覧会、共進会なども各地で開催されるようになったのです。

この頃には、養蚕改良高山社、競進社など私設の養蚕団体が順次結成され、養蚕技術の伝習、養蚕教師の養成、派遣が行なわれるようになりました。地方においても、県立養蚕学校、伝習所などの設立も相次ぎました。

展示会のタイトルでもある「養蚕教師」という語ですが、実はその定義が明確ではなく、身分、給与体系なども様々でした。実際、升も「養蚕教授員」という肩書きでした。また、公的機関職員としては「養蚕(農事)巡回教師」「県蚕事模範所教師」「県農業技師」「県農会教師」など様々な名称があり、女性の場合には「教婦」という言葉もありました。共通点は唯一つ「養蚕業に関わる技術、知識を伝授、教授する」ということだけです。

### 競進社の養蚕教授員として

競進社は、熟練者を教授員として、各地に派遣、改良普及を図っていました。

『競進社改良地一覧表』には、升の教授員としての赴任先・徳島県の麻植伝習所が記してあります。明治 31 年 4~6 月に夷隅郡(いすみぐん)立第二養蚕伝習所(千葉県)へ、明治 32 年 4~7 月には徳島県麻植郡(おえぐん)川島町郡立養蚕伝習所へ教授員として 15 名に講習を施しました。時期は春蚕の時期に決まっていました。そして、それを命じる競進社からの手紙も展示しています。徳島行きの際は、3 月 25 日に「養蚕伝習所教師之令」を受け、横浜から出発しました。4 月 4 日に養蚕法の講義を初め、7 月 31 日に 12 名に対する卒業証書授与式が挙行されています。升の日記や手帳には方言を記したり、名産品を食したりと現地での生活をエンジョイしている様子が伺えます。伝習終了後、郡役所からは蚕種の注文、教え子からは感謝の手紙、この伝習は大成功でした。

徳島の帰りの日記には、ペスト、ハレー彗星接近の噂などを書きとめています。升は、8月12日に帰省、17日に埼玉県競進社に帰って委細を復命しています。その後9月に、升は体調を崩して帰省、しばらく療養生活を送ることになります。長期赴任が必要な養蚕教授員の仕事ですから、楽なものではなかったようです。

### 小林升 交換した名刺 やり取りした書簡・書状

養蚕教師として各地を巡った小林升は、行く先々で名刺の交換をしています。その数は表のとおり146枚にもなります。また、名刺だけでなく遣った書簡・書状は書簡が約840通、書状は600枚にもなります。まだ、すべてを読み込むことは行っていません。それが終了すれば、升の足取りは更に明らかになり、養蚕教師の小林升の果たした役割もよりクリアになってくるのだと考えられます。

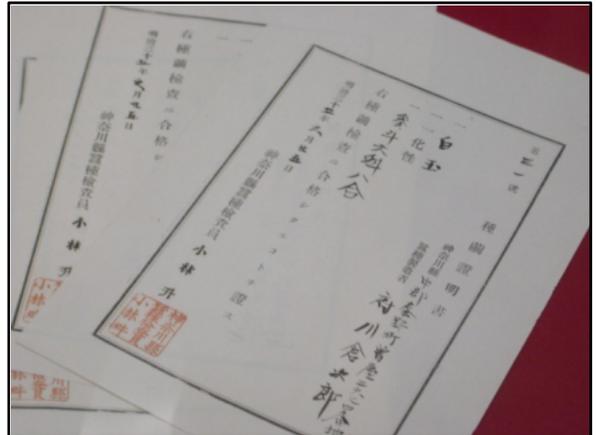
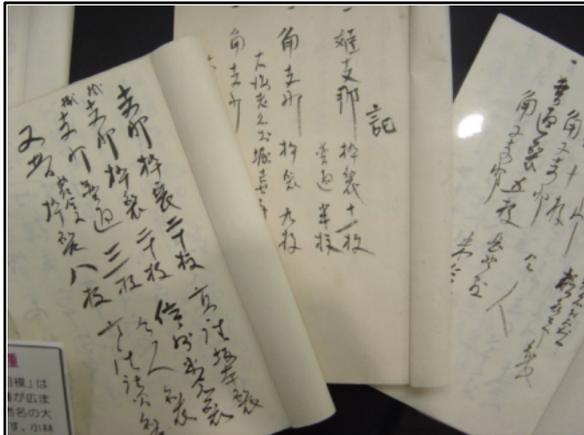
明治33年以降、小林升は神奈川県「蚕種検査員」に任ぜられます。蚕種は、検査所で管理され、証書が発行されました。委任状、請求書、蚕繭証明書、上蔭並二選繭発蛾期日届など各種書式の写しがメモに遺されており、検査員は、期間を限ったの委任で、給与は日給方式だったようです。

升は、明治33～35年の3回、県内を検査に廻っていますが、その中には大島正義(海老名)、関山五郎右衛門(宿河原)等の著名な養蚕家、順気社や足柄郡金子村の分社もみえます。大正2年の『大日本蚕業家名鑑』に記載される厚木の蚕種製造者は11名ですが、升が訪ねたのは梅沢忠右工門(山際)、佐野安太郎(下川入)といった14件でした。明治24年に中荻野で伝習所を経営、関谷流(高温密閉)の普及に努めていた関谷重次郎にも会っています。升が訪れた明治35年、関谷は製造を休止していることが、このメモから分かります。この伝習所はうまくゆかず、後に閉鎖されることとなります。

県名	枚数
岩手県	1
宮城県	1
福島県	1
茨城県	1
群馬県	14
埼玉県	30
東京市	6
神奈川県	32
千葉県	13
愛知県	1
京都府	3
新潟県	2
福井県	1
兵庫県	1
岡山県	1
徳島県	16
香川県	1
島根県	1
佐賀県	1
宮崎県	1
外国(朝鮮)	1
外国(中国)	1
不明	16
合計	146

### 蚕種検査員・小林升の確認した蚕種

升が蚕種検査員(写真右は蚕種証明書)として、県内を検査に廻った際の「蚕況視察報告」には、明治33～35年の視察先と蚕種の種類、掃き立て数などが記



されています。

神奈川県立原蚕種製造所が大正 3 年に発表した秋蚕種「相模」は支那種を改良したものです。神奈川に本種が広まったのは、名蚕家として知られた海老名の大島正義が導入、成果をあげたからです。升が県内を廻った際には、さほどシェアの高さは感じられない支那種ですが、次第に普及し、神奈川を代表する品種になっていきます。それに伴い、小林家の蚕室でも次第に支那種が主流になってきます(写真左)。

下表は、升が確認した蚕種の種類、そして、『大日本蚕糸会報』に掲載された神奈川と支那種に関する論考などのリストです。

蚕種名	件数 (64 件中)	概要
またむかし 又昔	24	伊達郡中瀬村の伊藤彦治郎が如来種より選抜。外山亀太郎によって「古来より飼育された蚕の種類中、その系統の最も明瞭、最も有名なもの」とされた。
しらたま 白玉	21	競進社の木村九蔵が選抜した「白玉新撰」は、一時期 50% を越えるシェアを誇ったという。
せいじゆく 青熟	19	明治 15 年創業の佐野安太郎(下川入)の大正期広告にもある。
しな 支那	9	大正期の広告で佐野安太郎が角支那を、佐野昇は支那 4 号、5 号、二化性支那を日支一代交配種として宣伝している。
こいしまる 小石丸	5	寛政頃、中如来種より小田中源右衛門が選抜。現在も皇居の紅葉山御養蚕所で採種、飼育されている。
ぎんこう 銀光	5	高座郡で 3 件、厚木でも下依知の 1 件で作られていた。

NO	タイトル	著者	掲載紙	号数	発刊年	備考
55	養蚕業製糸業者に警告す	若尾幾造	大日本蚕糸会報	168	1906	6 神奈川

56	養蚕家并製糸家に一言す	若尾幾造	大日本蚕糸会報	229	1911	6 神奈川
57	天下の製糸家が耳目を聳動すべき	井上篤太郎	大日本蚕糸会報	237	1911	6 神奈川
58	印度に輸入せらるる生糸及び絹織物類に就いて	井上篤太郎	大日本蚕糸会報	243	1912	6 神奈川
59	神奈川の支那種	田中良太郎	大日本蚕糸会報	285	1915	6 神奈川
60	神奈川の支那種 続	田中良太郎	大日本蚕糸会報	286	1915	6 神奈川
61	神奈川の支那種	石田孫太郎	大日本蚕糸会報	299	1916	6 神奈川